

令和元年6月5日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03081

研究課題名(和文)10世紀前後のクルグズ可汗国の定住的要素に関する碑文・遺跡調査と歴史文献学的研究

研究課題名(英文) Investigations on the Old Turkic inscription and relics and the historical philological researches on the sedentary elements in the old Kirghiz Khaganate around the 10th century

研究代表者

大澤 孝 (OSAWA, Takashi)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：20263345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本調査では2016-2018年の期間では、現在のロシア連邦のハカス共和国に残存するクルグズ可汗国の古代テュルク語で書かれた銘文や関係するタムガ、そして同時代の岩絵などについて、現地の研究者と共同で表面調査を実施した。実施場所としてはハカス共和国の首都アバカン市から南西のアスキス地区、イェニセイ河中流域のトゥバ川下流のスハニカ山やトゥラン山、さらにイェニセイ河中流左岸にあるテプセイ山、そしてアバカン川に流れ注ぐウイバート川周辺の草原、キュン・タグ山の城砦である。これらの調査成果としては、新たな銘文の解読成果や従来の解読を訂正すべきものについては、国際学会で報告している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中央ユーラシア史上、中央アジアのテュルク語化現象を引き起こしたイェニセイ・クルグズ族によるモンゴル高原への侵入とそれに伴う東ウイグル可汗国の崩壊という大事件に関わる歴史的背景を探るための一助として、現地の研究機関・研究者との現地調査を通して、10世紀前後のクルグズ族の古代碑文・遺跡・タムガや岩絵などを新たに収集したことは今後の当該研究テーマに取り組むための研究基盤を確立する上で、重要な意義を有する成果といえる。また本研究成果は、当時のクルグズ部族自身の目からみた彼らの文化や社会の特質を考察するための資料を新たに獲得したという意味で、重要な意義をもつものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In our international Joint epigraphical expedition between Japan and Russia, we investigated the old Turkic inscriptions, signs(tamga)and rock arts under the rule of Old Kirghiz Khaganate in the Askis, Sukhanik, Tepsei, Turan regions along the middle Yenisei Basin and the Uibat region near Abakan city, and the castle of the Kuntag Mountain along the Abakan River in the republic of Khakassia, Russian Federation during the period from 2016 to 2018. As the result of this project, I could find several new inscriptions, tamgas and rock arts and published preliminary papers in some academical international conferences.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：イェニセイ・クルグズ 古代テュルク語 タムガ 岩絵 アスキス テプセイ トゥラン モンゴル高原

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本科研の代表者である大澤孝は、1996年以降、今日まで文部省の科学研究費や民間団体の助成金を得て、モンゴル高原のほか、現在のロシア連邦のハカス共和国、トゥバ共和国、アルタイ共和国などの南シベリア草原、中国新疆、カザフスタン北部やクルグズスタン共和国などの中央アジアのテュルク系諸国の草原地帯で現地研究者と共同で実地調査を行ってきた。

その中でも本科研に関わる古代テュルク語資料に関わる調査としては、1996年から1998年にモンゴル西部から中央部における古代テュルク・ウイグル時代の碑文遺跡に関わる表面調査に研究分担者として参加したことが挙げられる。また2006年から2008年まで研究分担者としてモンゴル西方の碑文・遺跡調査に参加したこと、さらには2014年から2018年まで研究分担者として、モンゴル東部における古代テュルク時代の碑文・遺跡の発掘に関わる現地調査が挙げられる。

特に本研究と密接な関係を持つロシア連邦の南シベリア地域、即ちトゥバ共和国、ハカス共和国、アルタイ共和国においては、2002年以降、古代テュルク、ウイグル、イェニセイ・クルグズ可汗国に関わる古代テュルク語の碑文や岩壁銘文、そして関連する岩絵や埋葬・追悼遺跡の表面調査を現地の研究機関・研究者と共同で実施してきている。

中央ユーラシア史上、中央アジア方面へのテュルク語現象を引き起こしたという意味で極めて重要な事件と見なし得る9世紀中葉のモンゴル高原の東ウイグル可汗国の崩壊とイェニセイ・クルグズ族のモンゴル高原への進出に関しては、これまで研究者の大部分は『新唐書』ウイグル伝や『新唐書』クルグズ伝に記された記述をもとに事実経過のみが記述されてきた。

しかしその一方で、何ゆえにクルグズ族がモンゴル高原に進出しようとしたのか、その目的についてはウイグル国内の混乱に乗じてとしか説明されず、クルグズ族自身の立場からその原因を探ろうという研究姿勢ははなはだ希薄といわざるを得ない状況にあった。

そうした中で、本研究は従来の文献史料から考察されてきたイェニセイ・クルグズ族のモンゴル高原への南進理由を、クルグズ族に関わる碑文や考古資料の調査に加えて、遊牧民と定住民の関係性という新たな視点から資料分析を行い、クルグズ族の歴史文化の特性を再考することを目的に構築された。

### 2. 研究の目的

上述の如く、従来の本課題研究に関する研究は、主にモンゴル高原の東ウイグル可汗国内部の勢力争いの結果、惹起されたものであり、その原因はもっぱらウイグル側にあるとされて来た感否めない。しかし、大澤は、クルグズ族の南方への進出をクルグズ可汗国内部の事情にこそ存在する可能性があるのではないかと想定し、その原因をクルグズ族に係る現地語資料から分析・研究すべきとの観点から、当時クルグズ内部における定住要素のひとつである城址建設や定住遺跡と結び付けて、本研究に着手しようと考えた。

イェニセイ河中流域沿岸付近の山々には、かつてクルグズ族の本拠が置かれていたアバカンやミニシンスクやその周辺の草原地帯には、急峻な山稜をあたかも砦という形で建設し自陣の防御壁として利用したとおぼしき山城が散見される。しかしこれらの機能や歴史的意義の関する調査研究に関しては、管見の限りでは、不十分といわざるを得ない。

大澤はこれらの城塞の構造についての実地調査を通して観察することだけでも当時のクルグズ族にとって城砦がいかなる意味合いを有していたかを考察するための有効な方法と考えた。

また当時のイェニセイ河上・中流域を支配したクルグズ可汗国の興隆の背景には、既に紀元前の青銅器時代後期以降から存在した鉄器文化の存在や、それを継承した古代テュルク系遊牧民の中に存在した定住文化がかなり重要な働きをした可能性があると考えられるので、こうした遺跡や文化遺跡についても、クルグズ遊牧文化の特質を明らかにしたいというのが今回の研究目的であった。

### 3. 研究の方法

本研究では、研究対象地域がロシア連邦のハカス共和国のイェニセイ河中流域の草原地帯であることもあり、外国人が単独で現地調査することは許されておらず、どうしても現地研究機関との共同調査が前提条件となる。大澤はまずハカス言語歴史文学研究所を訪れ、共同調査を実施するため5年間の学術協定を同機関の所長と締結し、調査の際の体制、調査の具体的な方法や今後の調査成果発表について協議し、研究調査に着手する体制を整えた。

これまで大澤はハカス共和国中でも、比較的アプローチが容易なハカス南部のアバカン、アスキス、ミヌシンスク地方の青銅器時代から中世初期における埋葬遺跡や岩壁銘文の実地調査に重点をおいてきた。しかし今回は、今回はハカス北部のカラ・ユス地区やウルジー地区にも足を伸ばして、イェニセイ河中流に位置するクルグズ可汗国に関わる土城遺址の機能や歴史的意義について調査・分析を行い、クルグズ可汗国の中の定住文化の意味を考察しようと考えた。それに関連して、キズラソフなどロシア人考古学者は西暦9世紀以降、クルグズ可汗国には南方や西方からマニ教が受容されたとして、関係碑文や遺跡をそのような視点から分析してきているが、果たして当該地区に現存する遺跡や碑文などからこのことが裏付けられるのかという点に焦点を絞って、調査・分析を進めることとした。これと同時に調査の中でしばしば遭遇する「南イェニセイ文字」と呼ばれる新種のルーン文字を含むイェニセイ・ルーン文字銘文の成

立背景や作成過程についても、クルグズ可汗国内部の定住文化からの影響という視点から考察が可能ではないかと考え、この方向から現存する古代テュルク語碑文、関係遺跡や遺物の分析を行うことを目的とした。

また本調査を遂行するにあたっては、ロシア連邦ハカス共和国のハカス言語歴史文学研究所の考古学者と共同調査をおこないつつ、収集した資料の中で碑文や銘文などの文献学的史料に関しては大澤が解読を担当し、また考古遺跡や遺物など考古史料に関しては現地の考古研究者が分析調査するという形で役割分担を明確にしつつ、研究を進めて行った。しかし良くあることではあるが、当時の調査地の天候は極めて変わりやすく、路面が柔らかくて、車も入ることができないこともままあり、予定通りに調査を実施できないこともあったことを銘記しなければならない。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究を通して、少なからず、未報告の銘文が存在していることが明らかになった。その中でもアスキスのウイタグ山付近で発見された大型の碑文は、クルグズ可汗国に使える戦士である主人公が19歳のときに、モンゴル高原を経て、当時の唐北辺で、河西方面へ進出しつつあったタングート族と戦火を交えて、相手を殺傷したことを伝え、クルグズ可汗国のモンゴル高原への進入過程を考える上で重要な情報を持っているとみなすことができる。

(2) 上記のような重要な歴史情報は含まないが、現地の人々の山や岩への信仰を伝える新たな銘文の存在も、本調査によって明らかになった点は大きい。これらは主に自然物に靈魂が宿るアニミズム的な信仰に属するものであり、ロシアの考古学者が主張するように彼らクルグズ人がマニ教を崇拝していたことを積極的に証明するものではないということがわかる。もちろん、この点については考古遺物や遺跡についても再検討を要する。

(3) 本研究調査で再調査したトゥラン第3碑文には、これまで未解明である南イエニセイ文字が含まれており、その内容は不明であった。大澤は試みとして新たな読みの転写を示し、本碑文を解読した。この成果は今後の南イエニセイ文字を含む碑文解読において、重要な一歩といえるかもしれないと考える。

(4) ハカス北部のタガール時代の遺蹟から、少なからずクルグズ族特有の二重の半円系形のタムガを発見し、またそのひとつの立石からは、中世時代の岩絵と共にイエニセイ・クルグズ可汗国の高官であるイルキンの名前を含む古代テュルク語銘文を発見した。これについても国際学会で報告発表した。

(5) ハカス北部のイエニセイ河中流域にあるウルジート地区では、急峻な山の側壁に少なからずイエニセイ・クリグズのタムガや岩絵を調査することができた。これまでの調査研究が手薄な地域で、少なからずタムガや岩絵などの資料を発見できたことは、今後のハカス北部におけるクルグズ族の活動の足跡を辿る上で、重要な一歩となると考えられよう。

(6) しかしながら、定住要素としてのクルグズ可汗国内部の城砦調査に関しては、調査日を通して、天候が不順で風雨が強く、足場が悪いために十分な調査が出来なかったため、今後の課題としたい。しかし一部のキュンタグ山の城砦およびそこに刻まれた銘文を調査できた点は、要塞の機能を考察するための重要な足がかりになると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

大澤孝「突厥碑文 - その成立背景と歴史的意義」『歴史と地理—世界史の研究』721号、東京、山川出版社、2019年、37-45。(査読なし)

Takashi OSAWA, New discovery of Old Turkic runic sources of the Ulaachuluut Mountain from the Central Mongolia-On the basis of the Mongol-Japanese International Excavation of the 2018, *СРАВНИТЕЛЬНО-СОПОСТАВИТЕЛЬНОЕ ИЗУЧЕНИЕ ТЮРКСКИХ И МОНГОЛЬСКИХ ЯЗЫКОВ*, *Материалы Международной научно-практической конференции*, North Eastern Fedral University 2018, 13-25. (査読あり)

Takashi OSAWA, Esin N. Yuri. An attempt at interpretation of the South-Yeniseian runic inscription in Khakassia (The third inscription on the Turan Mountain), A. I. Poselyanin (ed.), *Material V. Mezhdunarodnoj Nauchnoj Konferentsii <Narodi i Kul'turi Sayan-Altaya i Sopredel'nikh Territorij> Posvashchennoj 85-retino so dnya rozhdeniya Vostokoveda, Arkheologa, Doktora Istoricheskikh nauk Vitaliya Epifanovicha Laricheva*, 2018, Vol.1, 58-63. (査読あり)

Takashi OSAWA, Esin N. Yuri. Novoe otkritie drevnikh tyurkskikh runicheskikh nadpisej i tamg rannego srednevekovogo perioda v stepi briz gorj Ujtag, *Narodi i Kul'turi Sayan-Altaya i sopredel'nikh territorij*, 2016, 79-82. (査読あり)

Takashi OSAWA, New cult-cultural interpretation on a passage of Orkhon text including

the iron and the tree in the Ötüken Mountains, *Vestnik Khakasskogo Gosdarstvo Universiteta im. N. F. Katanova* 14, 2016, 56-64. ( 査読あり )

Takashi OSAWA. Novaya Kulturno-Kul'tovaya interpretatsiya otrivka iz teksta orkhonskoj kulturi, vkryuchayushaya ponyatiya zhelezo i derevo po otnosheniyu k lesam i goram mestnosti Otyuken (iz 13-j stroki yuzhnoj storoni nadpisi v chest' Kyul' – Tegin, *Vestnik Khakasskogo Gosdarstvo Universiteta im. N. F. Katanova* 14, 2016, 64-71. ( 査読あり )

[ 学会発表 ] ( 計 3 件 )

Takashi OSAWA. New discovery of Old Turkic runic sources of the Ulaachuluut Mountain from the Central Mongolia-On the basis of the Mongol-Japanese International Excavation of the 2018, *СРАВНИТЕЛЬНО-СОПОСТАВИТЕЛЬНОЕ ИЗУЧЕНИЕ ТЮРКСКИХ И МОНГОЛЬСКИХ ЯЗЫКОВ*, *Материалы Международной научно-практической конференции*, on the 18th October 2018, North Eastern Federal University 2018, Yakutia.

Takashi OSAWA. New Interpretation of the runic inscription on the Silver Vessel from the Murui region, *International Workshop, Antiquity in the Gorno-Altai region, for the memory of B. D. Kubarev*, Institute of Archeology and Anthoropology, SORAN, Novosibirsk, 28<sup>th</sup> November 2016.

Takashi OSAWA. New discovered ancient Turkic Runic inscriptions and tamgas of the early Medieval period from the steppe near the Uitag Mountain, *Peoples and Culture of the Sayan Altai region and the neighbor territory*, Abakan Institute, Khkassia, on the 8<sup>th</sup> October 2016.

[ 図書 ] ( 計 0 件 )